

JAF AE Newsletter



No. 24 (January 2008)

第22回全国大会 / 熊本学園大学にて開催

プログラム

日本「アジア英語」学会・第22回全国大会
 日時：2007年12月1日(土)
 場所：熊本学園大学 高橋守雄 記念ホール
 大会総合司会：河原俊昭(京都光華女子大学)
 開会の辞：
 堀 正弘(熊本学園大学外国語学部長)
 米岡ジュリ(大会実行委員長・熊本学園大学)
 会長挨拶：本名信行(青山学院大学)
 基調講演1：木下正義(福岡国際大学)
 「このままでよいか日本の英語教育
 ー韓国、台湾、中国の英語教育と比較してー」
 基調講演2：本名信行(青山学院大学)
 「環境社会言語学と言語監査論をめぐって」
 研究発表
 第1部 司会：徳地慎二(宮崎産業経営大学)
 「日本語母語話者による英語前舌母音の
 発音の明瞭度」 上斗晶代(県立広島大学)
 「『茶の本』におけるレトリックとアイロニー」
 岡裏佳幸(福岡工業大学)
 「OEDs, JUCE 中の日本語からの借用語、
 貸出語の質的・量的分析」
 藤原康弘(大阪大学大学院)
 第2部 司会：橋内武(桃山学院大学)
 "Backpacker culture and language in south-east
 Asia and India: Focusing on the use of English as
 an international language"
 立山龍一(熊本学園大学大学院)
 "Writing Instruction in India: Current Practice
 and Future Directions"
 Renu Gupta(会津大学)
 "Relationship between English Education and

Tourist Industry in Cambodia"

Jeffrey Morrow (熊本学園大学)

シンポジウム「日本における言語監査の現状」

司会：米岡ジュリ(熊本学園大学英米学科長)

発題：

「言語監査の理論と実践

～言語監査の教育プログラム開発～」

猿橋順子(青山学院大学総合研究所客員研究員)

「日本の企業語学研修の現状と言語監査」

松本明子(東京電機大学 インストラクター)

「言語監査法による熊本の観光業の

言語ニーズ調査」

米岡ジュリ(熊本学園大学英米学科長)

「熊本の企業の(言語監査)：

現状そして現実」

富田省三(有限会社パラカロ 代表取締役)

閉会の辞：日野信行(大阪大学)

J A F A E 全国大会報告

第22回全国大会を振り返って

日野信行(大阪大学)

日本「アジア英語」学会の2007年度秋冬季大会としての第22回大会は、熊本学園大学で開かれた。九州での開催は、2004年度の宮崎産業経営大学に続いて2度目である。好天に恵まれた紅葉の美しいキャンパスでの大会は、思い出深い一日となった。

河原俊昭先生(京都光華女子大学)の総合司会により、まず会場校である熊本学園大学外国語学部長の堀正広先生からのお言葉を賜った後、大会実行委員長の米岡ジュリ(Judy Yoneoka)先生、そして本学会会長の本名信行先生から御挨拶をい

ただいた。

続く基調講演の部は、これまでの大会ではお一人だけの講演が通常であったが、今回の基調講演はお二人、しかも両先生とも日本を代表する著名な国際派の学者であるという豪華版であった。

まず木下正義先生（福岡国際大学）が、「このままでよいか日本の英語教育—韓国、台湾、中国の英語教育と比較して—」という御講演において、東アジア諸国の英語教育に関するデータと対照させながら、日本の英語教育の問題点を浮き彫りにされた。小学校英語教育や民間セクターによる英語教育を含め、英語教育への力の入れ方において、今日の東アジア諸国は日本をはるかに上回る面が多々あることをあらためて感じた。この現状に基づいて、日本の英語教育をどのような方向に進めるべきかを考えることは、われわれ各自に課された宿題であろう。



次に会長の本名信行先生（青山学院大学）による御講演「環境社会言語学と言語監査論をめぐる」では、言語環境の認識に基づく言語監査の重要性について論じられた。欧州から来たこの「言語監査」という概念はわれわれの多くにはまだまだなじみの薄いものであるが、アジア英語研究の先駆者であるとともに日本における言語監査論のパイオニアでもある本名先生から、直々に御解説をいただいたことは貴重であった。

午後のプログラムに入ると 6 件の研究発表があり、いずれも充実した内容であった。

徳地真二先生（宮崎産業経営大学）の司会による研究発表第一部では、まず上斗晶代先生（県立広島大学）が、日本語母語話者による英語前舌母

音の発音が英語母語話者にどのように評価されるかを実験した結果について発表された。アジア英語の立場からはさらに英語非母語話者による評価も知りたいところであるが、いずれにしても、日本人のための英語のモデルを考える上で有意義なデータをもたらす御研究であった。

続く岡裏佳幸先生（福岡工業大学）の御発表は、岡倉覚三（天心）の *The Book of Tea* をメタファーとアイロニーの視点から考察するものであった。アジア英語としての日本の英語ユーザーの元祖の一人と言える岡倉天心の英語著作を、近年の語用論の理論である関連性理論によって分析する研究であり、興味深いアプローチである。

藤原康弘氏（大阪大学大学院生）は、オックスフォード系の英語辞書、及び藤原氏御自身の編纂による「日本人英語使用者コーパス」に基づき、日本語からの「借用語」や「貸出語」に関する考察を提示された。アジア英語の語彙研究においてもコーパス分析による客観的な実証が重要であることを明確に示す発表であった。

岡裏先生と藤原氏の今回の御発表は、いずれも、本学会による公募と厳正な審査を経て獲得された助成金による研究成果を報告されたものである。この研究助成金は、学会年会費納入率の低下による財源不足のために現在募集を停止しているが、若手研究者お二人によるこれらのめざましい研究成果を拝見すると、アジア英語研究の振興のためには、年会費納入率が上昇して募集の再開が可能となる日が待ち望まれる。

小休止の後の橋内武先生（桃山学院大学）の司会による研究発表第二部は、当学会の国際性を反映して英語で行われた。

まず立山龍一氏（熊本学園大学大学院生）による御発表は、いわゆる *backpacker* と呼ばれる旅行者たちの言語使用の実態を中心に、タイ・ベトナム・ラオス・インドで実施されたアンケート調査の結果を分析したものであった。その研究対象の斬新さとともに、今回の会場校の大学院における研究レベルの高さを印象づけた。

続いて Renu Gupta 先生（会津大学）は、イン

ドにおける英語ライティング教育について発表された。アジア英語の中心地のひとつであるインドのライティング教育に関するいくつかの興味深い側面について学ぶことができたが、中でも、インドの英語教育における文学的伝統の強さに自分は特に関心を持った。

Jeffrey Morrow 先生（熊本学園大学）は、カンボジアにおける英語教育と旅行業界の関係について考察された。国際英語の研究において旅行業を対象とすることの意義や、現地でのフィールドワークの重要性などについて考えさせられる、示唆に富んだ御発表であった。

大会プログラムの最後を飾ったシンポジウムは、大会実行委員長でもある米岡ジュリ先生（熊本学園大学）の司会による「日本における言語監査の現状」であった。本日の基調講演の部における本名会長の御講演に呼応するテーマであり、まさしく本大会のハイライトの一つであったと言える。

まず猿橋順子先生（青山学院大学）の御発題では、言語監査の理論とその実践的応用について概観された。「組織が、組織に関連した言語ニーズを、どう認識し、どう対応するかについて、包括的で明確な見通しと対応策を持ち、それについて定期的な評価と見直しを行うこと」という言語監査の概念の定義に始まり、その特徴や意義について手際よくまとめられるとともに、言語監査論の専門家の養成についても論じられた。言語監査論への招待として理想的な内容であったと思う。

続いて松本明子先生（東京電機大学）は、航空会社の操縦士や客室乗務員などに対する英語研修を例として取り上げ、企業語学研修を言語監査の視点から考察された。このような具体的事例に即して分析していただいたことで、言語監査の意義に関する理解を深めることができた。

米岡ジュリ先生の御発題では、地元の熊本における観光業の言語ニーズの調査に言語監査の枠組みを適用された。熊本の国際観光都市としての興味深い側面について学ぶと同時に、言語監査論の応用可能性の大きさを感じさせる御発表であった。

最後に富田省三氏（パラカロ代表取締役）が、

通訳・翻訳・語学研修・異文化コミュニケーション研修・教材開発等を事業内容とされる企業のお立場から、言語監査について論じられた。企業活動の第一線での御奮闘ぶりをお聞きして感動するとともに、言語監査論の発展には学者と企業人とのコラボレーションが重要となるとの感想を持った。

これからのアジア英語や国際英語の研究において、言語監査論は主要なテーマの一つとなっていくであろう。この新しい概念に早くから着目されて研究を進めてこられた本名会長とその研究グループの皆様の先見性と洞察力に脱帽である。

基調講演・研究発表・シンポジウムを全体的に概観して感じるのは、開会式の本名会長の御挨拶でおっしゃっていた「アジア英語研究の拡がり」である。今回の大会だけでも、アジア英語研究には実にさまざまな視点からの学際的なアプローチが可能であることが示された。今後のアジア英語研究のさらなる発展へのプレリュードとなる意義深い大会であったと思う。

なお、懇親会は、私は列車の時刻の都合で失礼したが、馬刺など熊本の美味に加えて、ご当地ゆかりの宮本武蔵の登場などもあって、きわめて盛会であったと聞く。



最後だけ「です・ます」体で書くことをお許しください。大会実行委員長の激務をつとめられた米岡ジュリ先生をはじめ、熊本学園大学の先生方、スタッフの学生皆様に、当学会役員の一ひとりとして心より御礼申し上げます。また、御多忙の中、基調講演をおつとめくださった木下正義先生と会長の本名信行先生、御研究の粋を披露してくださ

った発表者の皆様、参加者の皆様、そして今回も大活躍の榎木蘭鉄也先生をはじめ学会事務局の先生方、まことに有難うございました。

上海のエリート教育

上海外国語大学附属外国語学校の場合

大和洋子（香港大学比較教育研究センター（CERC）准研究員）

外語大付属外国語学校は名称こそ専門学校のようだが、上海市の中でも名門中の名門中高一貫の進学校である。裕福な家庭の子女が多いので、地元では貴族学校とも呼ばれている。中学部は小6の学年、いわゆる予備班からあるので、全教育課程は7年だ。ここの中等部の入学入試を受けるためには色々条件がある。成績優秀はもちろんだが、生徒会長をやった（中国の場合、学習優秀者が任命される）、市内以上の何らかのコンクールで一等賞をとったなどと、希望した生徒が誰でも受験できるわけではない。そんな風に各学校から成績優秀者のみが受験して試験でよい成績を取った生徒だけが入学できるので、入ってきたときから相当に優秀な人材が揃っている。しかし一旦入ってしまうと卒業までエスカレートとは問屋が卸さない。高校となると大学入試が控えており、卒業生の進路は学校の名誉にかかわってくるので、中等部から高等部に進級するためにはかなり熾烈な内部進級試験があり、中等部の約3分の2の生徒を選抜して高等部に進級許可する。落とされてしまった3分の1もの生徒は市内の別の高校を受験しなおさなければならないのだ。

上外附中の教育課程は他の学校とほぼ同じだが、自分の専門の外国語がプラスで入ってくる。語学教育においては非常にスピードが速く、早いうちから聴解力と会話力に力を入れており、在学中に専門の外国語を極めてしまう超優秀な生徒もいる。英語科の生徒は高校2、3年時にTOEFLを受験するのだが、なんとPBで650点を超える生徒が毎年数名出てくる。日本語科の生徒の日本語レベルも非常に高く、中学生で既に日本人の平均的高

校生レベルの作文を書いてしまうほど。しかも、この学校の成績優秀者の多くは理系の学部に進学している。語学バカではないのだ。

上海市内にはこのような超エリート校といわれる学校が数校ある。そしてエリート校のどこも高三の一年間は中国の全国統一大学入学試験である「高考」のための総復習と試験演習に当てている。高校二年間で高校三年間のカリキュラムを全て修了してしまうのだ。その高考、中文、英語、数学の三教科の配点が理数系、文科系を問わず共通で非常に高い。高考は毎年6月頃に二日間連続で朝から夕方まで行われる。その間は市内中がピリピリした雰囲気にも包まれる。



写真は高考中、試験会場付近の道路に掲げられていたもの。「高考区域につき、車のクラクションを鳴らさないように」

アラブの英語

榮谷温子（東京外国語大学非常勤講師）

アラビア語には、/b/の音素はあるが、/p/はない。例えば、Japanは、/al-yaabaan/（al-はアラビア語の定冠詞）であるし、「バジャマ」は/bijama/である。そのせいであろうか、春休み（2007年）に訪ねた、エジプトのカイロ市内のアラビア語学校で、こんな広告を見かけた。

貸しフラットのチラシである。bathがpathと過剰矯正されてしまっている。



なお、room が rom とミスタイプされているところがあるが、アラビア語エジプト方言の母音は、短母音が /a/ /i/ /u/ の3種類、長母音が、/aa/, /ii/, /uu/ および、正則アラビア語の二重母音の /ai/ から転じた /ee/ と、やはり正則アラビア語の二重母音 /au/ から転じた /oo/ の5つであり、/i/ と /e/, および /u/ と /o/ の区別は、アラビア語話者にとって難しいものなのである。(/oo/ は /au/ から副次的に出てきたものに過ぎないので、/oo/ という音素があるからと言って /o/ と /u/ が弁別できるわけではないのである。)

また、アラビア語には、/f/ の音素はあるのに /v/ はない。その例が下の写真である。



看板の肖像は、シリアの現バシシャル・アル＝アサド大統領の父である、故ハーフェズ・アル＝アサド前大統領である。文言からして、シリアとどこかの国境近くで撮影されたものと思われるが、詳細は不明である。赤丸と矢印は、画像がメールで回ってきた時点で既に付されていた。

カイロ在住のアメリカ人の先生によると、エジプト人は、/f/ と /v/ の区別は、比較的初期の段階で習得するが、/b/ と /p/ の区別は、かなりの上級者でも不完全であるとのことだった。理由は、残念ながらわからない。

さて、下のような間違いは、日本人でもおかしってしまう可能性は十分あるだろう。



A Word of Wisdom from Gandhi for Asian Englishes

Mathew Varghese
Aoyama Gakuin University

The language that was popular only in the London area of England, in the middle of 16th century spoken by a small group of peasants has now become the language that can be used in any part of the world. This phenomenal growth of English in the last few centuries as a language that can be used for all sorts usages, and that could accept the essence of any culture in any part of the world has made it truly the language of the world. In recent years, the growth of English has taken a huge leap, especially after the end of the cold war period and with the advent of globalization. Now knowledge of this exceptional language is an educational necessity to stay in touch with the contemporary world that it is becoming the only acceptable international

language of today. This popularity and acceptability of English as a language of the world was mainly because of its easy logical structure, its extended existence in all parts of the world as the British colonial language from 17th century onwards, and its flexibility to adopt the tempo any culture in any part of the world.

Though English was a language used in the colonial India since the 17th century, it became a language of India in 1843, when Lord Macaulay introduced English as the official language and the educational language. When it assumed the position of the intellectual language, Indians learned it as a language and accepted it into the diverse linguistic cultures of India. The attitude of Indians towards English was totally different from their attitude towards the colonial rule. The colonial administration due to various reasons was a humiliating experience for the native people of former colonial countries, especially the hegemonic attitude that subjugated the original intellectual tradition of those colonial countries. English for that reason was considered by many as the language of colonial domination, and there was a call to reject English in many erstwhile colonial countries. The general attitude of Indians towards English is founded on the Gandhian view on English.

Mahatma Gandhi once wrote about English: "I am not anti-English, I am not anti-British, I am not anti-any Government, but I am anti-untruth, anti-humbug and anti-injustice." Mahatma Gandhi is a philosopher and an original thinker of our time who taught us the value of human dignity and cultural pluralism. He never despised the English language nor the British culture and people. However, he categorically rejected the snobbishness and false pride attached to English education. He again said in another instance: "I refuse to put the unnecessary strain of learning

English upon my sisters for the sake of false pride or questionable social advantage." Gandhi's attack was on the snobbishness of the English educated people in India, not to English language. They used this language to show a kind of ulterior pride and arrogance over the others who were not able to use this language. In the colonial India, the situation was that the rich and powerful who could send their children to English schools and later to universities in England could have found successful opportunities in life; whereas those who could not have this advantage had been forced to be contented with their rather uninteresting, rustic and dull rural life. On the other hand, the present education requirements demand that we need to teach English as a language for everyone.

Paradoxically, we now face a very tough situation with the English education in Japan. It unfortunately has taken in to a kind of neo colonialism where we are forced to teach English as an Anglo-American language, whereas it is necessarily to be taught as an essential language for global communication. The worst part of the present pedagogy is that students need to be trained in the stress timed speech system and the phraseology of the Anglo-American English, because of this unnecessary strain, the students' appreciation for natural languages reduce and they psychologically reject English from the inherent natural language learning process. I wish we need to consider English as a natural language, leaving aside all those snobbishness and the pomp of the Anglo-American contemporary culture. In Gandhian view when we teach a particular variety of English as the supreme model we are making a mistake of straining the students.

I hope this idea of Gandhi, the champion of civil rights movement could give a pedagogical

perspective for Asian Englishes. For learning English, we need not submit ourselves to the Anglo-American variety and culture or those of any other users of English. We need only to respect their contributions to English language. Necessarily we need to understand that English as a language that can take the cultural hue of Japan. The only persuasive reason for pedagogy of English should be that it is a global language and it helps our students to find advantage in international communication. In our curriculum plan we must think of teaching English with equal importance as Japanese, so that both the languages could flourish in their cultural backyard, which is much sensible than training them to plug a cozy flower from a distant land.

連載シリーズ

日本「アジア英語」学会の歴史④

河原俊昭（京都光華女子大学）

2003年の第13回大会は、早稲田大学でおこなわれ、Curtis McFarland氏によって講演“Filipino English”があった。同氏はフィリピンの諸語に深く精通しておられ、フィリピン人の奥様と二人で寄り添うように懇親会に参加されていた姿が印象的であった。第14回大会は中京大学で開かれ、特別講演はLarry Smith氏の“Exploring New Dimensions in Asian Englishes”であった。翌日に中京大学国際英語学部の主催によるWorld Englishes Workshopが同じ場所で開催され、Kachru夫妻、Paloo Nihalani氏などの著名人も参加され、この二日間は豪華なイベントとなった。

2004年の春は、相川真佐夫理事が世話役となり台北市への第3回海外研修旅行が開催された。永安国民小学、台湾師範大学などを訪問して台湾の英語事情をつぶさに観察することができて有益な研修旅行となった。この研究旅行の成果は、モノグラフシリーズの第4巻Taiwan Study Tourとして刊行されている。

2004年になり、第15回大会は電気通信大学でおこなわれ、John Maher博士による“Pidgins and Creoles in Japan”という講演があった。博士はピジン・クレオール viewpoint から日本の言語問題を分析したものであり、ユニークで刺激的な講演となった。第16回大会は宮崎産業経営大学でおこなわれた。この大会ははじめて九州でおこなわれたという点で画期的であり、12月4日という冬の日にもかかわらず暖かで、フェニックスの木が通りのあちこちで見られ、さすが南国という雰囲気であった。講演はErich Berendt博士による“Learning East and West: A Comparison of Conceptual Patterns and Altering Attitudes”であった。この年から研究助成金制度が始まった。若手の研究者に、アジア英語に関する研究を奨励するために、毎年2名に10万円を助成するという制度である。慎重なる審査の結果、第1回目の対象者として、梨本篤司氏と三宅ひろこ氏が選ばれた。

2005年だが、春に竹下裕子理事が世話役となって第4回の海外研修旅行として、タイへ会員8名が訪れた。トンブリー・ラジャバット大学やチュラロンコン大学などを訪問して、授業参観・教員との懇親などでさまざまな成果が上がった。初夏に、第17回大会が兵庫県立大学でおこなわれた。講演は、末延孝生氏による「言葉の寛容性と英語教育—英語エラー学の立場から」であった。末延氏が次の年の3月に定年を迎えるにあたっての最終講義であり、学生や一般人の参加もみられ大盛況であった。冬に、第18回大会が京都外国語大学で行われた。講演は台湾師範大学の張武昌氏による“Primary English Education in Taiwan”であった。

以上、この連載では、駆け足で、アジア英語の歴史を語ってきた。2006年以降は歴史として語るにはあまりに新しすぎる。時をおいて語った方がいいだろう。この日本「アジア英語」学会が今後もメッセージの発信を続け、英語教育関係者たちに一つの道を示す「たいまつ」のような役目を今後も続けることを確信して、この連載を終えた

い。

Book Review



『日本人にとって
英語とは何か』
大谷泰照著
大修館書店 2007年
ISBN: 978-4-469-24528-8
価格 1,800円+税

紹介者：橋内武（桃山学院大学）

本書『日本人にとって英語とは何か——異文化理解のあり方を問う』は著者大谷泰照氏（名古屋外国語大学教授）の長年の研究成果と年来の主張が凝縮した作品である。その技法は日本の異言語教育の変遷（特に親英・反英の往復運動 40 年周期説）という縦糸と異言語教育の国際比較という横糸がによって紡ぐ、独自の大谷織りである。B6 判で 239 頁で税込み 1,890 円という値段は買い得だろう。というのも、著者によれば、『英語教育と異文化理解』という仮題で書いた原稿を編集者の意向で縮め、標題のような取っ付き易い書物に仕上げたからである。だから、体裁の上では縦書きの読物であるが、中身の濃い啓蒙書に仕上がっている。これで、私たちはこの円熟した言語教育政策学者の持論を学術論文や雑誌記事の形でなく、書物の形でいつでも参照できる環境がようやく整ったのである。言わば、「待望久しい作品」であり、その出版は英語教育界にとって慶賀すべき事柄である。

本文は「はじめに」と「おわりに」に挟まれる 6 章に展開するが、次のような見出しからなる。第 1 章 日本の教育を点検する、第 2 章 揺れる日本人の言語・文化意識、第 3 章 日本人の異文化理解の考え方、第 4 章 日本の英語教育を糾す、第 5 章 英語教師に問われるもの、第 6 章 新しい時代の異言語教育を考える。その第 6 章の後に注が付く。

傍線を引くべき鋭い指摘がいくつも認められる

ので、繁をいとわずに挙げてみよう。「日本人の『数学学力世界一』は、日本人が本来もつ数学的能力の高さというよりも、多分に日本語そのものの力に負うところが大きい」、「学習者の母語の語系、言い換えれば学習者の母語と英語との間の言語的距離（linguistic distance）と、さらに欧米による植民地経験の有無が TOEFL の結果に見事にまでに鮮明に反映している」、「学習者自身の個別の言語・文化が、数学や英語の学習に……大きな関わりをもつ」、「欧米では……40 人学級などという多人数学級は一般には考えられない」、「2001 年度のわが国の国内総生産（GNP）に対する学校教育費の割合（3.5%）は、OECD30 力国の中でも、トルコとともに、並外れて最低である」、「平成の英語『第 2 公用語化』論や英語「教育言語化」論は、日本人の国際的姿勢が自信過剰の『反英』から、自信喪失の『親英』に転じた途端に浮上してくる」、「『国際理解を目指す』英語の学習には、単なる英語技能の習得だけでなく、言語・文化の多様性と相対性をありのままに認めようとする、いわば「リンギストシップ（linguistship：言語学習者にふさわしい態度）が不可欠な要件である」、「『日本語から最も遠く隔たった言語の一つとしての英語』教育として、とらえ直す必要がある」、「[日本の英語教師の] 90%以上が英語国在住経験をもたない人々である」そして、「[20 世紀は『戦争の世紀』ではなく]『戦争修復の世紀』であったと考えなければならぬ」。——これら鋭い洞察に富む識見は、専門の言語教育政策に立脚するところではあるが、歴史、思想、文学、言語学、数学などを含む幅広い教養に裏打ちされている。

執筆に当り、統計・図表・史料を縦横に駆使し、自らの調査や歴史上の人物の文章を引き合いに出しながら、論点を肉付けしている点は、研究者として見習うべき姿勢である。学術書の体裁を採らなかつたため、学生・教師だけでなく、英語について考える一般読者を想定読者に入れることに成功している。勿論、英語教育関係者には必読の書である。

日本「アジア英語」学会

2008年度海外研修

ウラジオストックへのお誘い

タイでの研修以降、しばらく途絶えておりました海外研修を2008年度に実施したく、ロシア・ウラジオストックにおける研修の計画をたてました。FEELTAのコンファレンスに合わせた日程につき、研究発表も可能です。個人ではなかなか足が向きにくい極東へご一緒にいたしませんか。ロシアの英語のユーザーとのコミュニケーションは大変に貴重な経験となるに違いありません。

日程：

2008年6月26日(木) 15時50分新潟発

6月29日(日) 14時20分新潟着

研修内容：

1. ウラジオストックの極東国立大学 (Far Eastern National University) にて開催される The Far Eastern English Language Teachers' Association (FEELTA) の7th FEELTA conference "Building Bridges with Languages and Cultures" に参加

2. 英語教員との懇談

3. 日本語教員との懇談

費用：航空券(約70,000円)、ホテル(1泊20,000円前後)、査証(5,250円)、ウラジオストック内移動費(参加人数による)、その他雑費

世話役：竹下裕子 <yukot@toyoeiwa.ac.jp>

申し込み：竹下までメールをいただければ参加申込用紙をお送りします。

FEELTAのコンファレンスの詳細

Call for Papers

14th NATE @ 7th FEELTA conference "Building Bridges with Languages and Cultures"

Russia's National Association of Teachers of English and the Far Eastern English Language Teachers' Association invite proposals for their

joint conference on language teaching and learning to be held June 26 - 28, 2008 at Far Eastern National University, Vladivostok, Russia
Hosted by: Far Eastern National University
Supported by the Far Eastern Branch, Russian Academy of Sciences

For more about FEELTA, see:

<http://feelta.wl.dvgu.ru/info.htm>

For more about NATE, see: <http://nate.vsu.ru>

Proposals:

short papers (25 minutes)

papers (50 minutes)

panels (110 minutes)

workshops (110 minutes)

poster sessions (displayed all day - presenters are expected to stand by their posters ready to explain and discuss them, for 60 mins.)

Deadline for the receipt of proposals and abstracts:

January 31, 2008

We are planning to publish Proceedings and presenters are encouraged to submit their paper during the conference.

Topic Areas:

English in the Pacific Rim Countries, Teaching Methods, Cultural Issues, English for Specific Purposes, CALL, Technology and Multimedia, Materials Writing, Teaching Literature and Arts, Teacher Development and Education, Interpreting and Translating, Linguistics, Other Languages, Global Issues in Language Education, Area Studies

Materials to be submitted:

application form, a title of up to 10 words, an abstract of not more than 150 words for peer review, a summary of between 50 and 75 words to be printed in the programme, a self-introduction of not more than 25 words
Submissions may be made by email to <feeltacon@dvgu.ru> or by regular mail to Zoya

Proshina, Far Eastern English Language Teachers' Association, Room 323, Far Eastern National University, Aleutskaya St., 56, Vladivostok, 690950 RUSSIA

事務局からのお知らせ

1. 次大会について

次大会は2008年7月5日(土)に金沢学院大学(石川県金沢市)で開催します。大会実行委員長は同大学の川畑松晴会員です。

第23回全国大会研究発表者募集

第23回全国大会(2008年7月5日(土)、於金沢学院大学)で研究発表を希望される方は、要旨(日・英どちらか)をWORD1枚にまとめ、2008年4月30日(水)までに、事務局の榎木蘭までメールにてお送りください。

hnenokizono@yahoo.co.jp

CALL FOR PAPERS

for the 23rd National Conference on July 5th, 2008 at Kanazawa Gakuin University. The conference committee invites submission of abstracts for papers. Submission is accepted with MS WORD and e-mail it to Professor Enokizono at [hnenokizono@yahoo.co.jp]. The deadline is Wednesday, April 30th, 2008.

2. 年会費納入のお願い

2007年度の年会費(一般会員5,000円、学生会員3,000円)を未納の会員は、お手数ですが以下へお振り込みをお願い致します。学会はみなさまからの年会費で運営しております。会員のみなさまのご支援とご協力をお願い致します。

振込先(郵便局)

加入者名: 日本「アジア英語」学会

口座番号: 00280-8-3239

会費納入に関する問い合わせは加藤

(mihoko@hse.tut.ac.jp)までお願いします。

ニューズレター編集担当より

今回のJAF AEニューズレター25号は、7月下旬発行予定です。会員の皆様から記事を募集致します。国内外の紀行文、書籍紹介、海外おもしろ

情報・画像、海外の新聞記事紹介など「アジア」「英語」「言語」周辺をキーワードに、800~1,200字程度で奮って投稿下さい。画像なども是非ご投稿ください。書いてみようというご意志がありましたら、6月下旬までに編集担当(相川, aikawa@nnc.or.jp)までお知らせください。

自分が知っているだけではもったいない、是非誰かと情報を共有したい、そんな情報をお持ちの方、どうかこの機会を通じてシェアして下さい。

【編集後記】

今回も記事が瀬戸間に集まり、編集作業を終えることができました。ご協力ありがとうございました。2008年、今年は北京オリンピックの年です。北京では多言語による情報サービスのプロジェクトを立ち上げているそうですが、「アジア英語」もあちこちで飛び交いそうですね。

2008年1月20日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 本名信行

編集長 相川真佐夫

印刷 (有)すずき印刷

事務局

〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1-25

白百合女子大学 田嶋宏子研究室内

FAX: 03-3326-4550

E-mail: tina2@gol.com

学会ホームページ: <http://www.jafae.org>

年会費振込先: 郵便振替 00280-8-3239

<<JAF AE Secretariat>>

Prof. Hiroko Tina Tajima

Department of English, Shirayuri College

1-25 Midorigaoka, Chofu-shi,

Tokyo 182-8525 JAPAN

FAX: 03-3326-4550

E-mail: tina2@gol.com

JAF AE's homepage: <http://www.jafae.org>

JAF AE's postal transfer account number:

00280-8-3239